様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３４３１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００００６９

研究課題名（和文）清弁(Bhaviveka)論理学の再評価ー陳那(Dignaga)の視点から

研究課題名（英文）Evaluation of Bhaviveka's Logic from Dignaga's Point of View

研究代表者
桂　紹隆（Katsura, Shoryu）

龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員

研究者番号：５００９７９０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：大乗仏教思想史において「中観派」を最初に標榜したとされる清弁（Bhaviveka ６世紀）は、仏教論理学を確立した陳那（Dignaga ５－６世紀）の影響下に「一切の存在は空である」という主張を論証式を用いて積極的に論証しようとして、帰謬論証のみを認める月称（Candrakirti 7世紀）によって厳しく批判された。本研究は、清弁の『般若灯論』に見られる論証式をすべて精査し、彼が「遍充理論」を含めて陳那の論理学に精通していること、唯一の重要な差異は「勝義としては」という限定句を「主張命題」に導入したことであることを明確にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
清弁と陳那の論証方法の比較研究はこれまで十分に為されてきたと言えない。本研究により、六世紀インドを代表する仏教思想家の方法論（論理学）の実態が解明され、インド仏教思想史の一断面がより明らかになった。
国際仏教学大学院大学の斎藤明教授、浙江大学の何歓歓教授、ボストン大学のエッケル教授などとの国際共同研究を遂行することにより、日米中の学術交流の推進に貢献した。
若手研究者や大学院生のために、仏教論書の原典を読む研究会を定期的に行ない、彼らの研究活動を支援することにより、我が国におけるインド仏教研究のレベルアップに努めた。

研究成果の概要（英文）：Bhaviveka (6 c.) is said to have named his position the Middle School (Madhyamika) for the first time in the history of Mahayana Buddhism; he tried to prove his thesis "All beings are empty of their intrinsic nature" by means of logical formulation (prayoga) under the influence of Dignaga (5-6 c.) who established the school of Buddhist logic. Bhaviveka was severely criticized by Candrakirti (7c.) who insisted to employ only the method of reductio ad absurdum in order to refute any thesis that asserts the reality of beings. Having thoroughly examined all proof formulations found in the Prajnapradipa of Bhaviveka, we came to the occlusion that he was well versed in Dignaga's system of logic, including the theory of pervasion (vyapti), and that the only significant difference was his introduction of the phrase 'ultimately' (paramarthatah) in his own theses.

研究分野：インド哲学・仏教学

キーワード：清弁(Bhaviveka)　陳那(Dignaga)　月称(Candrakirti)　般若灯論　仏教論理学　論証式　帰謬法

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

インド大乗仏教思想史を貫く深層底流は、龍樹（Nāgārjuna 2世紀）に始まる中観派と無着・世親（4-5世紀）によって確立された瑜伽行派との間で交わされた「無と有との対論」である。山口益(1895-1976)は、清弁(Bhāviveka, 6世紀)の主著『中観心論』第５章、その清弁に対して批判的立場をとった月称(Candrakīrti, 7世紀)の主著『入中論』第６章等に見られる瑜伽行派批判を集めて、『佛教に於ける無と有との對論』(1941)を著した。

第二次大戦後、いち早く清弁研究に取り組んだのは梶山雄一(1925-2004)であった。仏教認識論・論理学の研究者でもあった梶山は、『般若灯論』数章の翻訳を公表する一方、論証式を用いて「一切法空」を論証しようとした清弁の論理学を批判的に検討する「中観哲学の論理—序」など一連の論考を発表して、中観思想研究に新たな方向を示した。

清弁研究における大きな転換点は、『中観心論』の梵語写本が発見され、Christian Lindtner, 飯田昭太郎、江島恵教(1939-1999)他の手によって次々と各章の梵語校訂テキストや翻訳が出版されたことである。なかでも、江島は『中観思想の展開』(1980)を出版し、『中観心論』第３章の校訂と和訳を提示すると共に、同章第26偈に対する注釈『思択炎』と『般若灯論』第27章末尾とを用いて、清弁の論理学の特徴を、仏教論理学者である陳那(5-6世紀)の論理学と対比して、明かにした。

その後、立川武蔵や望月海慧による『般若灯論』各章の和訳研究、川崎信定による『中観心論』第9・第10章の梵語テキスト校訂と和訳(1992) などが公表されたが、Lindtnerによる『中観心論』全章の梵語テキストの校訂(2001) が公刊され、清弁研究は徐々に活性化していった。P. Hoornaert, O. Qvarnstrom, A. Heitmann, David Eckel, 何歓歓, 渡辺親文、斎藤明等が、次々と同書の翻訳研究を公表している。

しかしながら、梶山・江島によって提起された、清弁の論理学の特徴を明らかにするという課題はまだ十分に答えられていない。インド論理学の最初の綱要書『正理経』(2世紀)の自立論証を批判し帰謬論証を駆使した龍樹の伝統を継ぐ、中観派の清弁が残した膨大な数の論証式が、陳那論理学の視点から如何に評価されるかを探るのが、本研究の主たる課題であった。

２．研究の目的

清弁論理学の研究は、かつて梶山・江島によって行われ、すぐれた成果を生んでいるが、近年、研究代表者は新出梵語資料（ジネーンドラブッディの『集量論複註』）を用いて陳那論理学の研究を進めて来た。本研究の目的は、最新の陳那研究の成果に基づいて、清弁の主要作品に見られる論証式を精査し、清弁の「空性論証」の試みが成功したか否かを明らかにし、その結果として、清弁の論理学をインド論理学史に適切に位置づけることにあった。

本研究の学術的独自性は、梶山を除いて、これまで仏教論理学の研究者が必ずしも研究対象としてこなかった清弁の論理学を、斎藤・エッケル・何など清弁研究の第一人者と仏教論理学研究者が協力して、解明しようとする点にある。そのプロセスにおいて、定期的に原典を読む研究会を開催し、今後の仏教学界を背負って行く若手研究者を育てることも本研究の目的であった。

３．研究の方法

(1) 定例研究会において、中観派・瑜伽行派の次のような論書を、必要に応じて再校訂しながら、精読し、翻訳を作成した。ハリバドラの『現観荘厳光明論』第16章、安慧の『中辺分別論複註』第1章、清弁の『中観心論』と『思択炎』III.1-26。なお、最初3回の定例研究会では研究代表者が、若手研究者のために仏教論理学の大綱を講義した。

(2) 個別の研究会、もしくは、個人的に同様の作業をした。『般若灯論』第15章、第24章、第27章末尾、『掌珍論』『因明入正理論』『因明正理門論』など。

(3) 内外の研究集会に参加し、研究成果を発表すると同時に最新の研究情報を収集した。2018年12月第4回中観研究国際ワークショップ（国際仏教学大学院大学）、2019年11月第5回中観研究国際ワークショップ（龍谷大学）、2019年6月Yamāri Workshop （ライプチヒ大学）、9月Numata Symposium（カリフォルニア大学バークレー校）、11月Philosophy and Philology of Buddhism（オーストリア科学アカデミー）など。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

『現観荘厳光明論』第16章に関しては、研究協力者の道元大成を中心に「一切は一多の自性を欠くから、究極的には空である」という論証を詳細に吟味する部分を読了し、その和訳を『インド学チベット学研究』第23号・第24号に掲載している。（継続予定）

『中辺分別論複註』第1章に関しては、研究協力者の北山祐誓を中心に読み進め、その和訳の一部を『インド学チベット学研究』第22号、第23号、第24号に掲載している。（継続予定）

『中観心論』に関しては、第3章第1偈から第26偈まで、研究協力者の西山亮や田村昌己を中心に読み進め、特に清弁の論理学の概要を示す第26偈に対する注釈『思択炎』を読了した。

『般若灯論』に関しては、研究分担者の早島慧と研究協力者の西山亮が、第24章の観誓による複註の蔵文テキストの校訂と和訳の作成を継続して行ない、その成果を『インド学チベット学研究』第22号、第24号に掲載している。（継続予定）

研究代表者は、2019年夏に台湾の国立政治大学からやって来たSuan Linと『般若灯論』第15章を読了し、その成果として、第4回中観研究国際ワークショップにおいて、”bhāva, abhāva, svabhāva, parabhāva in the Mūlamadhyamaka- kārikā chapter 15”というタイトルで研究発表した。また第27章末尾の清弁による仏教論理学批判を扱う部分を江島、リントナー等の研究を参考にして読了し、来年プサンで開催される国際ダルマキールティ学会において、“Why Dharmakīrti introduced the concepts of conventional and ultimate *pramāṇ*as?”というタイトルで研究発表する。

『掌珍論』に関しては、研究分担者の五島清隆が前半部分の和訳を完成している。

陳那論理学の簡便な入門書である『因明入正理論』に関しては、研究代表者が、ライプチヒ大学の松岡寛子（現在、オーストリア科学アカデミー）の協力を得て、英訳を完成した。仏教伝道協会の英訳大蔵経の一部として公刊される予定である。さらに、漢訳にのみ存在する陳那の『因明正理門論』については、新出梵語資料を参考にして、書き下しの全面的な修正と詳細な解説、さらに英訳の作業を開始した。これは大蔵出版の新国訳一切経の一部として公刊される予定である。

本プロジェクトの最大の課題である、清弁の論理学を陳那の論理学の視点から如何に評価するかについては、研究代表者が清弁の『般若灯論』に登場する全ての論証式を精査し、次のような事実を確認した。

① 論証形式について。清弁が対論者による非難や批判に言及する場合には、「主張」「理由」「喩例」「適合」「結論」の五支、もしくは、「主張」「理由」「喩例」の三支からなる論証式を提示する。一方、自分自身の見解を提示する場合には、陳那に従って、通常「主張」「理由」「喩例」の三支からなる論証式を正しい論証形式として提示するが、「適合」「結論」を提示することを拒否しないと名言する。実際に、自身の見解を五支からなる論証式で示す場合も散見される。

② 清弁自身の「主張」の論証支には、しばしば「勝義としては／究極的には」(paramārthataḥ,

tattvataḥ)という限定詞が付けられ、時には対論者の「主張」の論証支にも同じ限定詞が付けられることがある。彼自身の「主張」は例外なく否定文で表現されるが、対論者の「主張」は通常肯定文で表される。

③ 「喩例」(dṛṣṭānta)の論証支は、通常「〇〇のごとし」という形で具体例のみが言及されるが、時々陳那の提唱した、論証対象と論証理由との間の「遍充関係」(vyāpti)を明示する場合がある。その際、「およそ甲であるものは、乙である」という形式をとるが、しばしば冒頭に「ここでは」('di na = *iha/atra)という限定句が見出される。これは陳那の論証式には見られない現象である。おそらく「この世では、およそ甲であるものは、乙である」という意味で、遍充関係が経験世界において成立することを示唆するものであろう。実際、陳那の「喩例」の論証支に時々見られる「経験される」(dṛṣṭa)という表現が清弁にも見出されることがある。

対論者の「喩例」の論証支は、論証対象と論証理由との間の「類似性」(sādharmya)に基づく「同喩」、もしくは「非類似性」(vaidharmya)に基づく「異喩」のいずれかで表されるが、清弁の場合は同喩しか登場しない。彼の論証式では、論証対象の「異類」(vipakṣa)が存在しえないからである。

清弁はしばしば、異類が存在しないから、正しい論証理由は異類に存在しえないと言うが、それは正しい理由の第三条件を自動的に満足させていると彼が理解していると想像される。同じ見解は、陳那や法称（6–7世紀）が共有するところである。

その結果、清弁は陳那の論理学を熟知し、そこから逸脱していないことが判明した。ただし、唯一の相違点は、清弁が主張命題に「勝義としては」という限定詞を付加することである。これは、おそらく陳那論理学の視点からは認められないことであり、清弁の「空性論証」は正当化されないことになろう。ただし、清弁以降の中観派の学匠たち（シャーンタラクシタやハリバドラなど）は、空性論証において「勝義としては」という限定詞をつけることになる。以上の内容を2019年に龍谷大学で開催した第５回中観研究国際ワークショップにおいて、“Bhāviveka's Proof Formulation Estimated by Dignāga's Logic”というタイトルで発表した。来年夏ソウルで開催される第19回国際仏教学会のパネルにおいて、その改訂版を発表する。

なお、第27章末尾の清弁による仏教論理学批判を扱う部分からヒントを得て、来年夏プサンで開催される第6回国際ダルマキールティ学会では、清弁によって「勝義として」全ての論証手段／認識手段（プラマーナ）を否定された仏教論理学派からの対応として、法称は「世俗的認識手段」と「勝義的認識手段」という概念を導入したのではないかという問題提起を行う。

2019年には、バークレーとウィーンで開催された国際シンポジウムにおいて、”Siderits on anumāna”というタイトルで招待講演を行い、陳那が「遍充関係」の理論を導入することによってインド論理学における論証式の形式に歴史的変化をもたらしたことを論証した。これは来年には出版されるSiderits Festschriftに掲載される。

少なくとも２年間は定例研究会を開催することができたので、若手研究者の養成という点でも期待通りの成果をあげることができた。それは彼らの内外の研究集会における学会発表と学術雑誌における論文発表という形で実証されている。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

六年前に、東京大学の斎藤明教授（現在、国際仏教学大学院大学）の発案で「中観研究国際ワークショップ」が開催され、内外の中観研究者が多数集まって、研究発表し、意見交換をした。それを受けて、本研究代表者と浙江大学の何歓歓教授は、それぞれ第2回・第3回のワークショッ

プを主催した。2018年には、国際仏教学大学院大学において、第4回ワークショップ**"Linguistic Challenges: Mādhyamikas and their Key Words"**が開催され、本研究プロジェクト参加者は、次のような発表をした。

Katsura, Shoryu, "Tibetan Translations of *svabhāva*, *parabhāva*, *bhāva* and *abhāva* in the 15th Chapter of the *Prajñāpradīpa*".

Saito, Akira, "*Prapañca* in the *Mūlamadhyamakakārikā*".

Eckel, Malcolm David, "Bhāviveka's Interpretation of the Term "No Cause" (ahetu) in MMK 1.1 and the Argument against the Concept of 'Lord' (*īśvara*)".

He, Huanhuan, "Mind and 'Mind' in Bhāviveka's Madhayamakah*ṛdayakārikā*".

Nishiyama, Ryo, "Bhāviveka on tathyasa*ṃ*v*ṛ*ti"

さらに、2019年には、龍谷大学で、第5回ワークショップ**"Madhyamaka and Yogācāra: A Dialogue between Two Main Streams of Mahāyāna Buddhist Philosophy"**が開催され、本研究プロジェクト参加者は、次のような発表をした。

Katsura, Shoryu, "Bhāviveka's Proof Formulation Estimated by Dignāga's Logic."

Saito, Akira, "Logic or Illogic: Reconsidering Bhāviveka's Critique of Buddhapālita."

Eckel, M. David, "Digressions in the *Tarkajvālā* and the Question of Bhāviveka's Authorship."

He, Huanhuan, "Bhāviveka on the Store-house Perceptual Awareness (*ālayavijñā*na)."

Nishiyama, Ryo, "The Middle of Truth: Bhāviveka's Interpretation on the *Mūlamadhyamaka-kārikā* 24.18."

Tamura, Masaki, "Bhāviveka's Refutation of Yogācāra Theory: His Strategic Approach."

以上から、本研究プロジェクトが中観思想に関する国際共同研究の一環として位置づけられ、国内外に一定程度のインパクトを与えていることが想像されるだろう。

(3) 今後の展望

2020年にソウル大学で開催される予定であった国際仏教学会が、コロナ過のため2022年まで延期された。したがって、研究代表者が提案して採択されたパネル"New Directions in the Study of Bhāviveka"において、上記2019年の第5回中観研究国際ワークショップで発表した、桂・斎藤・エッケル・何・西山・田村の六名が、それぞれほぼ同内容の改訂版を研究発表する予定である。コロナ過が収束した暁には、中観研究国際ワークショップを対面で復活させたいと思っている。

定例研究会は、対面で行うことができないので、ZoomやGoogle Meetを利用して、『中辺分別論複註』第1章の研究会を毎週行なっている。秋からは、『中観心論』第３章、もしくは第4章の研究会を再開する予定である。『因明正理門論』の書き下しは、本年度中に完成したいと考えている。

今後も、若手研究者の研究成果を査読した上で『インド学チベット学研究』誌上に掲載していく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 桂紹隆	４．巻 38
２．論文標題 ブッダの教え―此れあれば、彼あり。此れなければ、彼なし―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 武蔵野大学日曜講演会講演集「心」	６．最初と最後の頁 12-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 五島清隆	４．巻 25
２．論文標題 「相互依存」を漢訳語から考える	５．発行年 2020年
３．雑誌名 佛教大学 仏教学会紀要	６．最初と最後の頁 133-155
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 早島慧	４．巻 68-1
２．論文標題 『大乗荘厳経論』「種姓品」におけるAksarasisutra-何故「多界修多羅」と訳されたのか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 印度学仏教学研究	６．最初と最後の頁 381-386
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 早島慧	４．巻 495
２．論文標題 Some Characteristics of Sthiramati's Commentary in The Ta-sheng Chung-kuan Shih-lun	５．発行年 2020年
３．雑誌名 龍谷大学論集	６．最初と最後の頁 65-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桂紹隆	4．巻 第19輯
2．論文標題 龍樹の仏陀観―『根本中頌』に登場する「単数形のブッダ」と「複数形のブッダ」―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 駒澤大学　祝祷文化講演集	6．最初と最後の頁 39-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桂紹隆	4．巻 Vol. 56-57
2．論文標題 The Mode of Argumentation in the Fangbian xin lun / *Upayahrdaya	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Wiener Zeitschrift fuer Kunde Suedasiens	6．最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 五島清隆	4．巻 第24号
2．論文標題 チベット訳『宝篋経』―和訳と訳注(4-2)ー	5．発行年 2019年
3．雑誌名 佛教大学 仏教学会紀要	6．最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 赤羽律・早島慧・西山亮	4．巻 第21号
2．論文標題 Prajnapradipa-Tika　第XXIV章テキストと和訳(3) - uttarapaksa 2―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 インド学チベット学研究	6．最初と最後の頁 63-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 桂紹隆
2．発表標題 Bhaviveka’s Proof Formulation Estimated by Dignaga’s Logic
3．学会等名 5th International Workshop on Madhyamaka Studies（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 桂紹隆
2．発表標題 Mark Siderits on anumana
3．学会等名 Buddhist Philosophy: The State of the Field, 2019 Numata Symposium（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 桂紹隆
2．発表標題 Mark Siderits on anumana
3．学会等名 Philosophy and the History of Buddhism: 60 Years of Austrian-Japanese Cooperation（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 早島慧
2．発表標題 『大乗荘厳経論』「種姓品」におけるAksarasisutra Prabhakaramitraは何故「多界修多羅」と訳したのか
3．学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 早島慧
２．発表標題 チベット訳Sutralamkaravrttibhasyaにおける翻訳の特徴について
３．学会等名 第四回中日蔵学検討会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 桂紹隆
２．発表標題 bhava, abhava, svabhava and parabhava in the Mulamadhyamaka-karika chapter 15
３．学会等名 第四回国際中観ワークショップ（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 五島清隆
２．発表標題 龍樹『根本中頌』が提起する問題点
３．学会等名 平成３０年度仏教学会学術大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 早島慧（共著）	４．発行年 2019年
２．出版社 法藏館	５．総ページ数 208
３．書名 時空を超えたメッセージ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

インド哲学研究会 http://www.jits-ryukoku.net

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	五島　清隆 (Goshima Kiyotaka) (00771825)	龍谷大学・公私立大学の部局等・研究員 (34316)	
研究分担者	早島　慧 (Hayashima Satoshi) (70801372)	龍谷大学・文学部・准教授 (34316)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	斎藤　明 (Saito Akira)		
研究協力者	エッケル　デイビッド (Eckel David)		
研究協力者	何　歓歓 (He Huanhuan)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	西山　亮 (Nishiyama Ryo)		
研究協力者	田村　昌己 (Tamura Masami)		
研究協力者	北山　祐誓 (Kitayama Yusei)		
研究協力者	道元　大成 (Michimoto Daisei)		
研究協力者	松岡　寛子 (Matsuoka Hiroko)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
5th International Workshop on Madhyamaka Studies Madhyamaka and Yogacara: A Dialogue between Two Main Streams of Mahayana Buddhist Philosophy.	2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関